

楊振声と「玉君」

宮尾 正樹

はじめに

文化大革命以降、中国においては現代文学史の新しい枠組みの模索が行われているが、五四時期の文学に対する関心が相対的に高まっている印象を受ける。⁽¹⁾ 二十世紀文学に関する討論などで有名な銭理群が筆頭著者である『中国現代文学三十年』⁽²⁾は、中国現代文学が中国社会の変化と民族の覚醒、及び東西文化の衝突と影響の産物であり、時期による相違は認めながらも共通の特徴を有していると主張する。そしてその共通する特徴の最大のものとして、民族の魂（国民性）の再生を課題にし、それ故必然的に啓蒙的な性質を帯びることを挙げているが、⁽³⁾ 国民性の改造を清末や五四時期に固有の課題でなく、現代文学全体の課題ととらえることにより、解放後、そして現在の文学を、五四時期の文学を直接に継承するものと位置づけているように思われる。そうした傾向の中で、特に創作の面で、作品の質や完成度の点ではるかに劣るとはいえ、魯迅の「狂人日記」と同時期か、あるいはそれ以前の現代文学創作の試みに注意を払うようになったことは、歓迎すべきことであろう。⁽⁴⁾ しかし、それも新文学、より特定して言えばその直後に現われた所謂「問題小説」や「郷土小説」の先駆的作品としてその歴史的位置を与えられたばかりで、それらの作品、あるいはその作者たちに即した研究は今後の課題である。

本稿はこうした時期の代表的な作者の一人、楊振声（一八九〇—一九五六）を取り上げ、所謂五四退潮期の一九二四年に書かれた代表作の「玉君」を中心に、五四新文化運動の洗礼を受けた知識人の一つのタイプを探ろうとするものである。

作者について

最近楊振声の作品集『楊振声選集』が出版された。⁽⁵⁾「玉君」を初めとする小説の全作品と主要な散文、論説を収めたもので、作家の全容をほぼ窺うことができる。恐らく読者の多くにとって楊振声は馴染みのない作家であろうから、主として同書に付された孫昌熙・張華「楊振声著作系年簡表」によって、その略歴を記しておく。

楊振声は一八九〇年に生まれた。胡適よりも一ヶ年上で、新潮社の同人の中では年長の方である。⁽⁶⁾生地は山東省蓬萊県水城鎮は山東半島の北部にあり、沖合いに廟島群島が点在する。明代、戚繼光（海賊鎮圧に活躍した明代の武将）が水軍を訓練した場所であり、楊振声が生まれた頃は漁村であったという。⁽⁷⁾この故郷のイメージはいくつかの作品世界の形成に重要な役割を果たしている。一九一五年北京大学国文系に入学。一九一八年秋、新潮社の結成に参加し、第一期編集部書記に選ばれ、⁽⁹⁾『新潮』に「漁家」「一個兵的家」などの作品を発表する。五四運動の際、趙家楼放火に参加し逮捕される。一九一九年十一月官費で米国に留学、コロンビア大学とハーバード大学で教育学、教育心理学を修める。二四年帰国後は、武昌大学、北京大学、中山大学、清華大学、青島大学等の大学で国文学を講ずる傍ら創作を続ける。二五年二月代表作『玉君』が出版される。『現代評論』の第三卷（二五年十二月）より文芸欄の編集を行う。⁽¹⁰⁾二六年四月、徐志摩と共に『晨报副刊』の『詩刊』を編集。三二年青島大学校長を辞職し、教育部の委託で朱自清、沈從文らと北京で『高小実験国語教科書』と『中学国文教科書』の編纂に関わる。九月、沈從文と天津で『大公報・文芸副刊』を編集

する。抗日戦争中は南京、長沙、昆明と移動し、昆明の西南連合大学常務委員、秘書長、中文系教授を務める。四〇年中国国民党に入党。抗日戦争勝利後は『世界文芸季刊』『現代文録』や『経世日報・文芸週刊』などを編集する傍ら、四六年一月には北京大学の接收、復校工作を主管する。四六年十月、天津『大公報・星期文芸』の編集を担当。五二年長春東北人民大学に転勤、同大学中文系教授、中国文学史研究室主任を務める傍ら、吉林省人民代表大会代表、長春市政協委員、九三学社長春分社委員として活動する。五六年三月北京で病死する。

燕京大学の聴講生時代に楊振声の教えを受けた蕭乾も書いているように、楊振声は第一義的には作家であるよりも教師であった⁽¹¹⁾。文学研究会にも所属した葉紹鈞や兪平伯を除けば、新潮社の同人の殆どは後に学者やジャーナリストになった⁽¹²⁾。『新潮』に小説を発表した者について見ても、最も多くの作品を発表した汪敬熙は生理学者として名を成している⁽¹³⁾。尚、楊振声は四編を発表しており、作品数では第三位である。新潮社は新文化運動に関心を抱く学生の自主活動であり、⁽¹⁴⁾必ずしも文学志向の同人ばかりではなかった。にも関わらず、魯迅が『中国新文学大系・小説二集』の導言で述べたように、『新潮』は五四時期に新しい口語小説の試みを最も活発に行った雑誌であった⁽¹⁵⁾。そういう意味で、楊振声は汪敬熙と共に新潮社同人の、とりわけその文学的部分の典型とすることができると言える。汪敬熙が『新潮』掲載の作品以外には、一九二五年に数編の短編を書いた他は創作を残していないのに対して、楊振声は作品数は多くないにしても、抗日戦争後まで創作活動を続けており、その文学的活動の軌跡を辿る材料が豊富である。以上が新潮社同人（及び五四時期の若い知識人）の典型として、本稿で楊振声を取り上げる理由である。

「玉君」の評価

陳源は一九二六年に書いた「新文学運動以来の十部著作」で、文学革命以来の価値ある著作として、『胡適文存』や

『呐喊』と共に、長編小説として楊振声の『玉君』を挙げている。¹⁶⁾ 少し長くなるが、その箇所を引用する。

もし楊振声先生の『玉君』がなかったら、長編小説は全くないと言ってもいいくらいだ。しかし、『玉君』も決してここに挙げる資格を十分備えているというわけではない。構造に欠陥があるし、筋は時として映画のようである、文章は流麗だが伝統的な詞曲小説の雰囲気から脱し切れていない、などと欠点を挙げることができる。

さらに、題名ともなっている主人公の玉君は最後までその真面目をはっきりとは現わさない。しかし、あの愛すべき少女菱君を生んだだけで、『玉君』は十分価値のある創作といえることができる。まして、作品の真の主人公林一存は、中国の小説にはかつて登場したことのない人物である。彼は哲学者である。だが、味気ない言葉ばかりの哲学者ではない。彼は本の虫である。だが、何と愛すべき本の虫であろうか。一存の友人に対する義侠心、女性に対する優しさ、横暴に対する反抗、弱者に対する同情、それにいろいろな性癖（例えば相手が誰であろうと議論を吹きかける）、これらが相まって彼は読者の忘れ難い人物になっている。もし一存がフランスに生まれ、あと三十年長生きしたなら、『アナトール』フランスのシルベストル・ボナール『シルヴェストル・ボナールの罪』"Le Crime de Sylvestre Bonnard" (1881) の主人公である老学士院会員―筆者〕のような人物になったであろう。しかし、林一存は若き中国人であり、林一存に他ならないのである。

文学革命後十年近いとはいえ中長編小説の絶対数がまだ少なかった時期でもあり、十大著作（実際には十二）の一つに数えられたこと自体、ある一つの位置を示しはしても、大げさに考えることはないであろうが、陳源のこの作品の読み方、特に一存の人間像のとらえ方は現在でも魅力的である。

一方、魯迅は一九三五年に『中国新文学大系・小説二集』導言で、『新潮』発表の楊振声の作品について、「楊振声は人民の間の痛みや苦しみを書くことに務めた」と述べた後、その後の創作に対して次のような評価を下している。

〔汪敬熙が五四時期の戦闘精神を忘れたのに対し、〕しかし楊振声の創作は「漁家」〔楊振声の処女作、『新潮』一巻三期掲載一筆者〕よりも更に発展した。ただ、往時の戦友汪敬熙とは対照的に、彼は「主観に忠実であろう」とし、人間の手で理想の人物を作り上げようとした。しかも、自分の理想によるだけでは不十分だと思い、何人かの友人に教えを乞うて何回か書き直し、ようやく「玉君」という中編小説を書き上げた。

この後『玉君』の自序を引いて、さらに、

彼は先ず「自然を芸術化しよう」と決める。その唯一の方法は「うその話を語る」ことであり、「うその話を語るのが小説家である。」そこで、その規則に則って、しかも広く衆議を集めて『玉君』が生まれたのである。しかし次のことは確かに言える。それは人形に過ぎず、彼女は生まれた瞬間に死んでいるのだ。我々はその後この作家の創作を見ていない。

魯迅は同じ文章で、『新潮』掲載の小説全体に対して、技術的には幼稚だが、前向きで社会改革の道具として小説を用いようとしたと評価しながら、しかし五四以降は主な同人が欧米に留学して、創作が衰え、人生のための文学も当然衰えてしまったと評価を下しており、楊振声に対する評価とも対応する。それはまた、『自選集』自序の有名な「ある者は出世し、ある者は引退し、ある者は前進した⁽¹⁷⁾」という五四退潮期の『新青年』同人の一部に対する評価と同じ文脈でとらえることができる。

従来中国における楊振声に対する評価はこの魯迅の評価に従ったものだったが、最近の文学史の著作においては、おむね「玉君」に一定の肯定的評価を与えているようだ。例えば、楊義は魯迅の評を引きつつも、「客観的に見て、この長編小説の組み立ては精巧で、文体も洗練されており、当時あっては読むに堪える長編であった」と述べ、込み入った愛情物語で封建的婚姻制度を批判しているのは見るべきものがあるとし、ただし漁村生活の牧歌的情緒に染まりす

ぎている点などを批判している。⁽¹⁸⁾

『玉君』の出版について

「玉君」の執筆に着手したのがいつかは不明だが、恐らく一九二四年に米留学から帰国してから書き始められたと思われる。十一月十五日付け胡適宛の書簡によると、既に全体の三分の一を書き上げ、順調にいけば来月の初めには完成するだろうと述べ、原稿は真っ先に胡適に見てもらいたいと希望している。⁽¹⁹⁾ 作品は予定通りに完成したよう⁽²⁰⁾で、魯迅が皮肉ったように、まず鄧叔存（以鬻）に原稿を見せ、その意見により修正し、次に陳通伯（陳源）に目を通してもらって書き直し、更に胡適に見せて批評をもらい、三度目の書換えをして、⁽²¹⁾ 翌二月、北京の現代社から『現代社文芸叢書』の第一種として出版された。⁽²²⁾

初版の『玉君』の発行所については資料により食い違いが見られる。今村与志雄氏は学研版『魯迅全集』の「中国新文学大系」「小説二集」序⁽²³⁾の訳注で、唐弢『晦庵書話』を引いている。⁽²⁴⁾ それによると、蔵書家で知られる唐弢にして初版は最後の数頁の欠けたものしか所蔵していない。上海書店の影印版も再版本を使用していることから、現物を確認することは現在では困難かもしれない。

今村氏は唐弢の記述（第三版の奥付）と氏の所蔵する樸社刊『陶庵夢憶』に付された広告を根拠に、人民文学出版社版の原注（現代社と記す）に疑問をはさんで、初版『玉君』の出版者を樸社ではないかと推定している。李立明『中国現代六百作家小伝』⁽²⁵⁾も『中国文学家辞典・現代第二分冊』⁽²⁶⁾も『玉君』を樸社の発行としている。だが、再版本（影印版）の奥付は発行者現代社（北京大学第一院）、民国十四年二月初版と記し、扉の上辺に「現代叢書」、右辺に「文芸叢書第一種現代社出版」と記している。

この叢書の出版の経緯からこの間の事情を見てみよう。

陳金淦は現代評論派が『現代評論』を発行する傍ら、積極的に新文学の叢書を出版したと述べ、『玉君』『志摩的詩』『一隻馬蜂及其它独幕劇』『寒灰集』(郁達夫)の書名を挙げている。⁽²⁷⁾

『中国近代現代叢書目録』は『現代叢書』の項目に『玉君』一種を挙げ、一九二五年二月一版、五月再版、一九二七年北京樸社三版とする。また、『現代社文芸叢書』の項に丁西林の『一隻馬蜂及其它独幕劇』を挙げており、同一の叢書としては採っていない。⁽²⁸⁾

『現代評論』一卷九期(二五年二月九日)に「本刊特別啓事」として『現代叢書』の出版予告が掲載されている。それによると、『現代叢書』は文芸、自然科学、社会科学、哲学の四類に分けて刊行され、まず文芸叢書が出版される予定だということである。そこに挙げられた作品は陳金淦が挙げたのと同じ四種である。発行は現代社、現代社の通信処は現代評論社内にとある。してみると、現代社とは『現代叢書』出版のために、現代評論社の中に設けられた一部門と考えてよいのではないだろうか。

更に『現代評論』を繰っていくと、一卷十三期(二五年三月七日)には『玉君』が出版されたことを告げる広告が載っている。『玉君』の初版は「現代評論社」の『現代叢書』の『文芸叢書』の一種として、「現代評論社」の叢書刊行部門の「現代社」から出版されたと考えてよさそうである。⁽²⁹⁾

『現代叢書』のその後についても触れておくと、二五年五月、第三種として『一隻馬蜂及其它独幕劇』、同じく八月第二種として『志摩的詩』が予定通り出版された。当初第四種に予定されていた郁達夫の『寒灰集』は、「印刷中」という広告が二五年九月ごろまで見られるが、その後叢書のリストからは外れる。『現代評論』の創刊には一役買った郁達夫だが、創刊後は文章を寄せてはいるものの、経営に深く関わることはなかった。⁽³⁰⁾二五年九月といえば、『洪水』半

月刊が創刊され創造社の活動が再び活発になり、郁達夫自身創造社に再びコミットし始めた頃である。⁽³¹⁾ 創造社出版部の創立準備も進行しており、具体的な経緯を語るものはないが、郁達夫と現代評論社との間で何らかの交渉が行われて、既に印刷中の『寒灰集』の出版を取りやめて、翌三月成立することになる創造社出版部から発行することになったのではないかと想像される（同書の出版は二七年六月）。そして二七年春の新月書店創立、七月の『現代評論』上海移転の前後から、発行所を新月書店に移して『現代叢書』の発行が続く。「欠番」を埋める形で凌淑華『花之寺』が第四種として、第五種として陳源の『西澄閑話』、第六種としてモーロワ著、陳源訳『少年哥德之煩惱』が出版された。広告により確認できたところでは、『現代文芸叢書』として出版されたのは以上の六種である。⁽³²⁾

『玉君』出版後の反響は小さくなく、初版発行部数は不明だが、四月にならない内に売り切れ、再版が出された（奥付によると五月発行⁽³³⁾）。また、『晨报副刊』『現代評論』『京報副刊』などに批評記事が載った。⁽³⁴⁾ 筆者は多くを見ていないが、『晨报副刊』に金満成が三月末までに発表された批評を踏まえた批評を寄せている。⁽³⁵⁾ それによると、哲学的すぎるとか、大胆さが足りず感情に忠実でないとかの批評はあったが、総体的には本格的な長編小説の出現として歓迎されたようである。

「玉君」

「玉君」の筋立てはそれほど複雑なものではない。

「私」は留学を終えて郷里の町に帰っているが、両親は留学中に亡くなり、他の家族も家を離れて、何人かの使用人がいるだけである。旧友の杜平夫の頼みで、杜の留学中、親の許しを得られない婚約者周玉君の後ろだてになる。玉君は「私」の幼なじみであった。何年ぶりの再会後、「私」と玉君は互いを意識し合うが感情を抑制する。玉君は父親

から軍閥の息子との結婚を迫られ自殺を図る。「私」は玉君を自分の別荘に引き取る。玉君は島の漁民との接触の中で元気を回復し、漁民の子供たちのために学校を開こうと計画するが、町では玉君と一存が淫らな関係にあるという噂が立つ。そこに杜平夫が帰国して噂を聞きつけ、玉君をなじる。杜は後に誤解と知って詫びるが、玉君は拒絶し杜は去る。玉君は島で一存と妹菱君と一緒に暮らすことを希望するが、一存は自分の土地を売った金で玉君をフランスに留学させる。

粗筋は以上のようなのだが、陳源も指摘したように、最も成功し、興味深い人物は語り手の「私」——林一存である。五四新文化運動の洗礼を受け、西洋に（留学先はフランスらしい）留学して近代的教養を身につけた知識人だが、職業は持たず、使用人の張媽に、他の家の息子は皆立身出世しているのに、一存だけが家の金を頼りにぶらぶらしているところばざれたりする。親戚の趙大娘に玉君との縁談の話を持ち込まれて心に動揺をきたし、一度は北京に出て教師になるが、玉君から助けを求める手紙を受け取ると、北京や学校に嫌気をさしていたこともあり、一年余で舞い戻って来る。男女の平等や教育の普及といった思想への信頼は失っておらず（恐らくそれが一存という命名の由来であろう）、時に触れて使用人に説教をしたりするが、言葉は全く通じ合わない。（一存自身その通じ合わせを楽しんでいる風がないわけではないが。）

玉君は封建道徳の被害者であったが、自らの社会的使命に目覚め、最後にはフランス留学に旅立つ。使用人の興児は自由な結婚など考えられもしない男だったが、同じ使用人の琴児との間に子供ができると、仲人なしに結婚し、子供が教育を受けられるように努力することを一存に約束する。このように何人かの人物が自らの新しく生きる道を見いだしていくが、一存も自らの生き方を模索する。

彼は罪の意識に駆られている。玉君の幸福のために、玉君と交渉を持つてはならないと思いついていながら、杜平夫の依頼、趙大娘の縁談の勧め、玉君の自殺未遂などで否応なく玉君と接触し、その都度、玉君を醜聞にさらしたり、非

難を受ける材料を作ったりして、結果的に玉君を窮地に陥れていく。一存はこう呟くしかない。「一存、一存、お前は本当に馬鹿だ。むざむざと玉君を葬り去ってしまった。」(第六章)そして贖罪として玉君を社会の攻撃から守ろうとする。

友人の婚約者である玉君への思いを断ち切れない、その苦悩は夢で表現される。例えばエジプトから杜平夫の手紙が届いた後、一存は夢の中で、夕陽の砂漠で杜平夫の率いる盗賊団に捕らえられるが、平夫は傍らに美女を侍らせている。腹を立ててなじると平夫は笑って言う。「玉君がお前と結婚した以上、何が悪いのだ。」(第三章)⁽³⁶⁾

玉君を保護しなければならぬという義務感と玉君への愛情の自己抑圧とに一存は苦しむのだが、そこからの脱出の契機を与えるのが、玉君の分身であり、かつ玉君と一存の仲介者でもある菱君である。菱君との交流自体、一存にとっては満たされぬ玉君との関係の代償行為の意味を持つが、菱君は一存、玉君、菱君の三人の関係を牛郎織女の民間故事に何気なくなぞらえる。一存はそれにより自分の立場と生き方を、牛郎と織女と一緒に幸せに暮らせるように自らの身を犠牲にした老牛に同化させるようになる。三人の関係を語る箇所がいくつもあるが、その内の一つを引いておく。

(島で子供たちに勉強を教えたり、一緒に劇をやったりしたいと言う玉君に対して)

「それならあなたは本当に彼女らの織女になるんですね。」

「誰が牛郎？」菱君は目を見開いて尋ねた。

「君が牛郎だ。」

「それなら先生が牛のおじいさんね。」そう言うや、顔を玉君の胸に埋めた。

「ちょうどいい。役者がそろった。学校創立最初の劇は『天河配』(牛郎織女の伝説を題材にした京劇の題名)だ。」

(第十八章)

そして最終章の、玉君と菱君を船着場に見送る場面で、私は菱君にこう言う。

「おねえさんと一緒に外国に行きなさい。牛のおじいさんだけ後に残してね。」

杜平夫が玉君に拒絶されて去った後、読者は一存と玉君が結ばれるだろうと予想し、一存が玉君と菱君の二人をフランスに留学させて一人後に残るといふ結末に不自然さを感じるだろうが、老牛の立場に身を置くことを自らに課した以上、作者が「私」を去らせるために仕組んだ、島を敗残兵が襲うという事件がいかに唐突で不自然に映ろうとも、一存は二人の船出に同行するわけにはいかないのだ。

私は一人小舟の上に座って行方も定めず漂っていた。辺りを見回すと海と空の広がりの中に、遙か彼方の空の際に、群れからはぐれた雁が一羽、離れ雲を追って飛んでいた。

この最後の文章は冒頭の

初秋の晩、窓外の月は澄み切っていた。私は一人で部屋の中に座り、孤独な影が書架に映し出されていた。

と呼応して、玉君との再会から別れまでの出来事の全てが、一存にとって一つの大きな夢であったかのような印象を与える。夢から醒めて彼は再び孤独と無為の生活に戻っていくことが暗示されているようだ。だが、一存は無償の自己犠牲によって、少なくとも一人の弱き女性を封建道德の桎梏から社会に解放した。それは作者楊振声が五四新文化運動の中で育んだ見果てぬ夢ではなかっただろうか。

一存ら三人の関係を描くのに牛郎織女の伝説を用いたのが端的な例だが、作者は意識的に民間伝承や民衆の文化を作品の中に持ち込んでいる。

五四以来、多くの知識人は民間伝説など民衆文化に強い関心を示した。最初は民間の歌謡の採集に始まり、次第に民間伝説や伝承に範囲を広げていった。それは学術的関心にも増して、封建道德への反抗と新しい文化の創造のエネルギー

一の源泉として、西洋の近代文化と共に、文明に汚されない民衆の文化を重視したからであった。勿論、その指向自体西洋の民俗学の影響を強く受けたものではあったが。⁽³⁷⁾

楊振声自身の民衆文化への関心は一九二六年に書いた散文「從紅毛鬼子説到北大国学門週刊」にも表明されている。⁽³⁸⁾

「北大国学週刊」の内容について門外漢の感想を言わせてもらえば、歌謡や民間故事の研究に特に大きな希望を抱いている。……数年前北大が歌謡を採集し始めてから現在の週刊に到るまで、中国文学は多くの本當に価値のあるものを発見した。……民間故事の伝説になると、……詩歌戯曲小説の本物の材料であり、我々の文学の未開拓の鉱脈であり努力して発掘しなければならない。

また同じ頃、民間の応答歌の体裁で「這個年頭兒、我勸你将就些兒罷！」という詩も書いている。⁽³⁹⁾

一存は礼教を批判する議論を吐き、中国の最も有害な学説として「不孝に三あり、後なきを大とす」と「人欲を絶つて天理を存す」を挙げる。前者は中国に貧困をもたらした教育の普及を妨げ、後者は人間の感情を抑圧して人間性の発達を妨げたというのである。その一方で作者は農漁村の人々の労働や祭りを美しく描き出す。ことに漁民の歌う漁歌や、七夕の晩の島での「乞巧」(裁縫の腕が上がることを祈って行われるが、作品に描かれる「乞巧」は北京などで行われたものとは大分違って、もやしを針穴に早く通すことを少女たちが競う)などの行事は、同じ山東出身の王統照も賞賛しているように、地方的色彩豊かに非常に魅力的に描かれている。⁽⁴⁰⁾

楊振声は三十年代になって、故郷とおぼしき地方の島を題材にした小説を何編か書く。⁽⁴¹⁾ 島は「太古の原始状態を保存して」⁽⁴²⁾ おり、花嫁の略奪や、相手を袋詰めにして海に投げ込む私刑など、野蛮とも思える風習を残しているように描かれているが、その住民に作者は真の人間性の発露を見いだす。「玉君」においてはそれら後の作品ほど島の「自然状態」が強調されていないが、一存ら「文明人」は島の雰囲気に感染し、空腹のままに棗の実泥棒を試みたり、見知らぬ家

で昼食をご馳走になったりして、既成の道德の枷から解放されたような気分を味わう。それは単に「反礼教」というよりは、「反文明」の契機さえはらんでいくように感じられる。チャンタイ・ホン（洪長泰）が指摘するように、それは当時の「到民間去」の運動にも見られた傾向であった。⁽⁴³⁾

漁民の風習に触れ、漁民と交流する内に、玉君はそれまでのひたすらに受動的な生き方から、自ら社会に出て行く意志を持つようになる。そして自らの生きていく場所としても島を選択する。それが幻想に過ぎないことは作者も承知して、島での略奪事件を口実に、一存の配慮によって、中国の伝統的文明ではなく、西洋文明の社会に送り出されるのだが。

玉君に比べると、『新潮』掲載の楊振声の初期の作品の人物ははるかに不幸である。彼らはいずれも封建倫理や軍閥政治の被害者だが、しかしそれ故に不幸だということではない。

「貞女」のヒロインは婚約後に死んだ男の位牌としたり通りの婚礼を挙げ、寡婦として静かに暮らしている。ところが、春のある日、庭で花の香を嗅ぎ、仲睦まじく遊ぶ蝶を見ている内に、彼女は「目覚めて」⁽⁴⁴⁾しまつて、その夜自らの命を絶つ。

また、「磨麵的老王」の主人公老王は、石臼をひいては小屋に帰って寝る生活を何十年も続けている。ところがある日、仕事を依頼に来た男の子の純真な笑顔に「心の奥底の愛を引き出さ」⁽⁴⁵⁾れてしまい、自らの人生の無意味さを悟り、少年と草の上で戯れる夢を見ながら死んでいく。

蝶や花、純真な子供に触れることによって人間本然のあり方に思い到り、従来の無自覚な被抑圧生活の非人間性に気付くという構図は楊振声に限らず、汪敬熙や葉紹鈞の作品などにも見られる。登場人物が自らの意味を反省する契機が、社会的なものでなく、広い意味での「自然」であることは、例えば魯迅の作品の人物における徹底した社会指向（阿Q

や祥林嫂」と対照すると興味深い。『新潮』の作品における人間性を回復しようとする試みは登場人物に不幸をもたらした。それに比べて玉君は親の強制や社会の嘲りに一度は自殺を企てるが、島という文明に汚されていない場所を与えられ、再生の道に歩み出す。それは先にも述べたように、民衆文化の中に、伝統文化への反抗と新文化創造のエネルギーを見いだした(と思ひ込んだ)新文化運動の一つの傾向の形象化だと言うことができよう。一存に託した自己犠牲の精神と共に、作者楊振声の内に、五四退潮期の挫折と憂鬱を経ても尚、五四新文化運動の理想が健在であることを、「玉君」の読者は見てとることができるのである。

注

- (1) 五四時期の文学を専ら扱った『中国五四文学史』(朱德發著、八六年十一月、山東文芸出版社)なども現われている。
 - (2) 八七年八月、上海文芸出版社。
 - (3) 同書、七頁。
 - (4) 上掲の他、唐弢等『中国現代文学史』(八〇年十二月、人民文学出版社)、趙遐秋他『中国現代小説史』(八四年三月、中国人民大学出版社)など。
 - (5) 八七年六月、人民文学出版社。楊振声の作品の他、蕭乾と楊振声の子供の楊起の回想、孫昌熙・張華「楊振声和他的創作」及び同「楊振声著作系年簡表」が収められている。
- 尚、死後『玉君』のタイトルで他の十一編の短編と合わせて作品集が出版されている。(五七年十一月、人民文学出版社)、又、『中国現代文学史参考資料』の一種として『玉君』の二五年再版本が影印出版されている(八五年五月、上海書店)。
- (6) 傅斯年は一八九六年、羅家倫は一八九七年の生まれ。楊振声より年長の同人には黄建中(一八八九年)がいる。
 - (7) 楊起「懷念我的父親」(『楊振声選集』)。

- (8) 李小峰「新潮社の始末」(『文史資料選輯』六十一、七九年四月。原載は『上海文史資料選輯』七八年一期)。
- (9) 「新潮社雜誌社啓事」(『北京大学日刊』一八年十二月三日)。
- (10) 陳漱渝「關於『現代評論派』的一些情況」(『中國現代文學研究叢刊』八〇年三期)。
- (11) 蕭乾「我的啓蒙老師楊振声」(『楊振声選集』)。
- (12) 鳥居浩子「五四運動と新潮社」(『お茶の水史学』十三、一九七〇) 参照。
- (13) 一八九七—一九六八年。作品集として『雪夜』(二五年十月、亜東図書館)がある。
- (14) 傅斯年「新潮之回顧与前瞻」(『新潮』二卷一期、一九年十月)。
- (15) 三五年七月、良友圖書印刷公司。『且介亭雜文二集』所収。尚『中國新文學大系・小説二集』には、楊振声の作品として、「漁家」が収められている。
- (16) 『西滄閑話』(二八年六月、新月書店)に収める。初出は『現代評論』三卷七十一、七十二期(二六年四月)。ちなみに、陳源が挙げる価値ある著作とは以下の十一種である。
- 胡適『胡適文存』吳稚暉「一個新信仰的宇宙觀与人生觀」顧頡剛『古史弁』郁達夫『沈淪』魯迅『吶喊』郭沫若『女神』徐志摩『志摩的詩』丁西林『一隻馬蜂』楊振声『玉君』謝冰心『超人』白薇『琳麗』
- 尚、陳源の選択、及び評価を公平で独創的だとする最近の論考もある。(吳三元「試評《西滄閑話》」『中國現代文學叢刊』八二年四期)
- (17) 『魯迅自選集』(三三年三月、天馬書店)、『南腔北調集』所収。
- (18) 『中國現代小説史』(八六年九月、人民文學出版社)。
- (19) 『胡適來往書信選・上』(八三年十一月、中華書局香港分局)。
- (20) 二五年一月六日付け胡適宛て書信(前掲書)は、新學期の講義の準備のため完成を急いだと書いている。作品の終盤になって筋がめまぐるしく動き、結末が唐突に訪れることの理由の一端を物語っている。

- (21) 『玉君』自序、及び二五年一月六日付け胡適宛て書信(前掲書)。
- (22) 『現代評論』に連載されたとする資料もいくつかあるが、その事実はない。
- (23) 第八卷、八四年十一月。
- (24) 『玉君』及び「再記『玉君』」(八〇年九月、三聯書店版)。
- (25) 七七年十月、波文書局。
- (26) 八二年三月、四川人民出版社。
- (27) 「関于『現代評論派』」(『中国現代文学研究叢刊』八〇年三期)。
- (28) 八〇年二月、上海図書館。
- (29) 再版以降について。『晦庵書話』はその所蔵する初版テキストと樸社刊三版のテキストの一部を紹介して、両者の間に大きな異同があると述べている。影印本再版テキストは初版テキストと殆ど同じで、現代社刊。三版から発行者が樸社に変わる。唐毅はまた、三版の表紙の図案について、武士がさらった美女を駱駝の上に乗せていて、「アラビアン・ナイト」の趣があると書き、その書影を載せているが、この絵は現代社再版本に使われていたものと同じである。初版は白地に、「玉君」と青字の篆書で書いてあるだけだとのことである。初版が現代社発行で、再版出版に際して表紙のデザインが変更され、第三版では表紙はそのまま本文に修正が加えられ、発行者が友人の俞平伯らが経営していた樸社に変わった、という経緯らしいが、その理由は不明である。
- (30) 陳漱渝前掲論文。
- (31) 小谷一郎編「創造社年表」(伊藤虎丸編『創造社研究』七九年十月、アジア出版)。
- (32) 『現代叢書』では他に、『近代欧州外交史』『比較憲法』『各国社会運動史』が『社会科学叢書』として商務印書館から出版されている。
- (33) 『現代評論』(一九二五年十一月七日)の同書広告による。

- (34) 陳貴福「『玉君』(楊振声)」(『中国現代百部中長篇小説論析』八六年一月、吉林大学出版社)。
- (35) 「我也談談關於『玉君』的話」(二五年三月三十日、三十一日)。「晨報副刊」には他に王統照(筆名TC)が「對於『玉君』的我見」(三月二十五日)を寄せている。鄭慧英『書評索引初編』(一九三四年七月、廣州大學圖書館、一九七〇年三月、台灣學生書局覆印)によれば、三月から四月にかけて十一編の書評が、『晨報副刊』『京報副刊』『鑑賞副刊』『學衡』の各誌に掲載されている。その筆者の中には、孫伏園、許傑、吳宓などが含まれている。
- (36) 『玉君』の表紙の絵はこの場面を描いたものと思われる。
- (37) 新文化運動と民間文學の関わりについて、Hung, Chang-tai "Going to the People—Chinese Intellectuals and Folk Literature, 1918—1937" 1985, Harvard University Press. を参照。
- (38) 『現代評論』三卷六十五期、二六年三月。
- (39) 『現代評論』三卷五十七期、二六年一月。
- (40) 前掲論文。
- (41) 「搶親」(『獨立評論』二十八期、三二年十一月)「報復」(『大公報・文藝副刊』三十二期、三四年一月)「拋錨」(『文學雜誌』一期、二七年五月)「荒島上的故事」(『世界學生』二卷五期、四二年六月)。
- (42) 「荒島上的故事」。
- (43) Hung, Chang-tai 前掲書。
- (44) 『新潮』二卷五号、二〇年九月。
- (45) 『新潮』三卷一号、二二年十月。